東亜大学　総合人間・文化学部　教員談話会要旨

近代における「上方」のイメージ

――歌舞伎をめぐる言説を中心に――

澤　井　万七美（文化文明史研究室）

「上方」ということばは、原則としていわゆる京阪地方を指している。芸能に関しては、近世以来「京」「大坂」「江戸」の三都がそれぞれ個性ある芸風を持つものとして並立していた。実際には京・大坂をひとまとめにして「上方」と称することも多く、ことに近代以降「上方芸能」という場合には、京都・大阪両方のものを指すことが共通認識となっている。

「上方」を冠した芸能には、現在「上方舞」「上方落語」「上方歌舞伎」などがあり、いずれも「伝統」「古風」なものというニュアンスをもって語られることが多い。「上方」という存在そのものが、「東京」の対比物として、一種の「非・標準」という役割を期待されることもしばしばである。このようなイメージが定着したのは、なぜなのだろうか。

明治期の中央集権化は、政治面のみならず、文化面においても着々と進んでいった。「新しい」ものを受け入れ、発信する帝都「東京」。その輝かしさを強調するがためのように、「上方」に対しては「古い」ものさえ保存すればいい、時代遅れの存在といった言説が次々に繰り出されていった。それに対して在上方の文化人たちが掲げたのが、新しいものの創造ではなく、「かつては上方こそが文化の拠点」といったことばであった。結局は自ら「古さ」頼みに陥ったのである。

こうして形成されていった「東京」対「上方」の構図は、現代のメディアにも影響を与えているのではないだろうか。

（平成17年2月24日実施）